

ゆめじゆく会総会

6月17日(金)平成23年度の瀬戸会館活動連絡協議会(「ゆめじゆく会」)総会が開かれた。日頃当会館で活動する団体、サークルなどの皆さんにお集まりいただき、それぞれの仕事の関係もあり夜の会合となった。

まずは出席者が順に自己紹介。館を利用するグループの多彩なことに気づく。原英彦会長のあいさつのもと議長を選出し、議事の審議に入る。第一議案は昨年度の活動報告。その主な内容は定期総会、「であい展」の実施、夏まつり、年末大掃除、資源ゴミの回収、「ゆめじゆく」編集会議の六つ。



なかでも、年末大掃除では地域の皆さんもふくめ約50人の参加があったこと、資源ゴミの回収で5月末日現在、新居浜市からの奨励金を合わせて31,065円の成果があったことなどが報告された。次いで「会則改正」が提案され、役員の仕事が「10名程度」から「活動団体代表および自治会関係者」となったほか、実質的に運営しやすい組織に改編された。

また、「平成23年度活動計画」についても、昨年度に準じた原案が承認された。第五議案の「役員改選」では、新会長に小野博(てん刻教室)さん、副会長に高橋照代(モダンダンス)さん、岡崎恵美子(トールペイント)さんの両名が留任。退任のあいさつで前会長原英彦さんは「自分自身、勉強になりました。皆さん、無理のないように、出来る範囲で活動していただければ・・・」と語り、新会長小野博さんは「今までの活動を受け継いで、副会長や他の役員と力を合わせて発展させていきたい。」と述べ、会を閉じた。



瀬戸会館だより
平成23年7月号
新居浜市瀬戸会館
〒792-0821
新居浜市瀬戸町7-30
E-mail
seto@city.niihama.
ehime.jp
TEL 0897
41-5859
(FAX 兼用)

南沢笑子さんの想いをつなぐ会

6月7日(火)標記の会の第3回準備委員会が瀬戸会館で開かれた。実は、長野県出身の南沢笑子さんは新居浜市の男性と結婚したのだが、結婚先の家族が彼女の身元調査をする。その結果彼女が被差別部落出身とわかり、夫の家族は過酷な差別を続け、耐えかねた笑子さんは自死に追い込まれた、という事件があった。



平成21年12月、当館で南沢笑子さんの50回忌法要を行ったが、「もう差別のない世の中になりました」と笑子さんの霊に報告できなくやしさが残る。「痛ましい差別があった新居浜市の市民として、この事件をどうとらえ、教育や啓発にどう活かしているか」と自問しても、その不十分さにもどかしさを覚える。この会は、南沢笑子さんの想いを語り継いでいくことにより、人権・同和問題の解決を図ろうとするもの。今回はその活動を支える組織をたちあげるための準備委員会で、高津章人さんからこれまでの経過が説明された。次いで5章28条から成る標記の会の「会則(案)」が示され、条文の検討が進む。

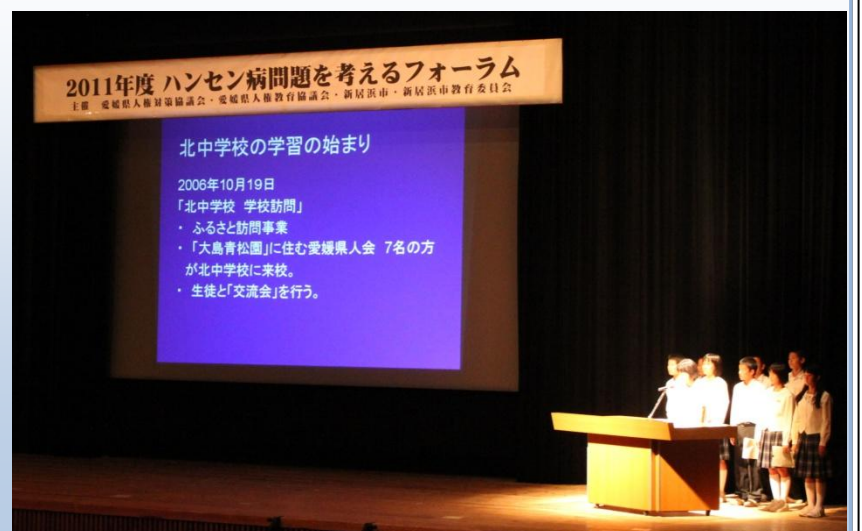
また出席者の間で、笑子さんの遺書、長野での裁判記録、新聞記事ほか当時の資料に議論が及び、それらの確認と保管、活用のあり方についても話し合われた。

『ハンセン病問題を考えるフォーラム』を開催

6月18日(火)愛媛県人権対策協議会、愛媛県人権教育協議会、新居浜市などが主催する標記の会が市民文化センターで開かれた。ハンセン病は昔、「らい」と呼ばれ、らい菌によっておこる感染症。菌そのものの毒性は少なく、感染力もとても弱い。たとえ感染しても自然に治り、発病はまれ。今はリファンピシンなどの薬で確実に治せる病気。

感染力の弱さが裏目にて、愛情こまやかな接触をする、家族などの間でしか感染しないようにみえる状況から、遺伝病と、さらに治らない病気と誤解され、差別されてきた。この差別を強力に後押ししたのが国の隔離政策で、強制的に療養所に収容してきた。完全に治った今も、ふるさとに帰れない人がたくさんいるのが現状。佐々木龍新居浜市長のあいさつのもと第一部が始まり、新居浜市の商業高校、南高校、北中学校の生徒たちが次々に登場。

裏へ続く



7月公演
回転木馬
おはなし会
7月6日予定
10:40~11:00
瀬戸児童館

人権あらかると

「北原泰作にはなれなかった」

川口泰司（山口県人権啓発センター）

ここ数年、県外の企業や行政、教育関係者など多くの方が、山口県萩市の被差別部落へ研修にやってくる。多くが「県外視察研修」「先進地視察」という名目で来るのだが、萩市の部落がそこまで「先進地」といえるわけではなく、むしろ差別の実態、解放運動は厳しい地域だ。ボクもこの間、コーディネーターとして視察の受け入れをしている。

視察研修では、県内の部落差別の現状報告、岩田利平・県連名誉顧問からの聞き取り、地区内フィールドワーク、萩の部落史と関連スポットをまわる。

岩田顧問は、今年で100歳を迎える活動家だ。幼少期、萩水平社結成当時のようすや周囲の変化、松本冶一郎との面会、全国水平社大会など、参加者にとって聞くものすべてが、歴史上の人物や事件であり、まさに山口県の解放運動の生き証人である。ボクも岩田顧問の話は何回も聞いた。その聞き取りの中で岩田顧問が、必ず涙で言葉がつまる部分がある。それは顧問が戦争で経験した部落差別の話だ。

野営の病院で負傷した兵士、生きるか死ぬかという戦場で仲間の兵士にたいして「あいつはこれ（4本指をつきだし）だから」と陰でささやかれる。その言葉を聞くたびに、「オレも部落だが何が悪い！」と心の中で叫びながらも、何も言い返すことができなかった。自分が部落だとわかると、今度は自分が差別されてしまうのが怖かったからだ。1927年、軍隊内での差別に抗議し、天皇に直訴した北原泰作のことを語り、「私は北原泰作にはなれなかった」と涙ながらに悔しそうに語る。

ボクはこの話を聞くたびに、100歳になっても解放運動にとりくみ続ける岩田顧問の原点がここにあると思っている。あのときは差別を前にして「逃げた」かもしれない。でも、80年以上もその事実と向き合い続けている姿は、決して「逃げて」いるとはボクに思えない。その事実と今も戦い続けているのだから。

『解放新聞』（解放新聞社、2009年10月12日、「マチからムラから」）より。

香川県の大島青松園を訪問したり、学校で学んだことを報告し、北中生の「単なる学習に終わらせたくない」というメッセージが心に響く。

第二部のシンポジウムには大島青松園愛媛県人会の本田久夫さん、磯野常二さんほか6名が参加。米田孝弘さんの司会でそれぞれの想いが語られた。このあと会場を変えて交流会がもたれ、参加者は約60名。軽い食事のあと、そこここでいくつもの人の輪ができる。たくさんの中高生が積極的に本田さんや磯野さんに話しかけ、耳を傾ける姿が印象に残った。

「人権のつどい日」にひろう

6月11日（火）は『人権のヒント（地域編）』というDVD教材の視聴で始まった。『「思い込み」から「思いやり」へ』をテーマとしたこの教材は、街の喫茶店で展開される話題の形でドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）、障がい者の人権、同和問題などがでてくる。

強い、典型的な偏見や差別と違って、「女上司と男の部下、やりにくい？」「障がいのある人、かわいそう」など、これまで何気なく交わってきた世間話などの中に、先入観、思い込み、勝手な決めつけがひそんでないか、改めて点検する良い機会となった。

ありがとうございました

5月23日に出勤すると、当館の敷地内がすっかり除草されきれいになっていました。管理人の沼田さんのお話では、地域の皆さんが前日の日曜日に作業されたとか。本当にありがとうございました。

7月の主な行事予定

7月2・16日（水）－ 移動図書館（14:00～14:40）

7月11日（月）－ 人権のつどい日

ビデオ「クリームパン」の視聴と話し合い

7月26日（火）－ 高齢者宅訪問（午前中）

7月7日（木）－ であえおはなし会（15:50～16:10）

元気なたんけんたい

泉川小学校2年生の22名が5月31日（火）瀬戸会館を訪れ、職員が出迎えた。すると玄関口で「じんのーせんせい！」と口々に声がしてにぎやかになる。館の女性職員神野さんが小学校の放課後児童クラブで紙芝居や本の読み聞かせをしていることから、おなじみだったようだ。

たんけんたいの皆さんは、黄色い帽子をかぶり水筒を持って、大きな「たんけんばつぐ」を肩にさげ、その中にはメモをとる記録用紙が入っている。この日は『生活科』のお勉強で「町のひみつをしらべよう」とばかりの意気込み。案内された部屋でたんけんたいの皆さんは「どんな人がりようしていますか」「ここは、いつできたんですか」など次々と質問。引率している教頭先生や同行している7人の保護者が温かく見守っている。館長からは質問への答えのほかに「こ



こ瀬戸会館は、みんなが楽しく生活できるようにするところです。」と説明があった。

最後は起立して、一斉に「ありがとうございました。」とお礼のことば。

次はすぐお隣の瀬戸児童館でのたんけんとか。

